

# 第 5 章

## 展望編



## 1 展望(1) 子育ては自然にかえれ

巷野悟郎

### はじめに

近頃は少子高齢化時代という文字を、よく目にしますが、実際に街中から子どもの声も、あまり聞かれなくなりました。昔遊んだ空き地や、河原なども姿を消してきている時代ですが、最近はずに育児、子育て、教育というような文字が目につくようになりました。

子育ては太古の時代から人類の生活のなかで、ごく普通のことだったのに、近年強く意識されるようになってきたためと思われます。こうした現象の背景には、やはり子どもが少なくなってきた少子化があると思われます。そして最近では待合室やバスや電車の中での授乳姿なども見るのが少なくなりました。子育ては核家族の家庭の中へこもってきているようです。

子どもの「育ち」は、いつの時代でもどのようなときでも、人達との関係の中で進行していきます。子どもには生まれつき成長し発達していく力がそなわっています。しかしそこにはおとなとの関わりが必要なのです。どう育てるかではなくて、生まれつき育つ力をもっている子どもと、どう関わるかです。

### 母乳栄養

乳児のからだは、すべてが母親のからだで作られたものだから、生まれた乳児は母親と同じ。母親の乳は乳児にとって、これ以上優秀なものはありません。乳児は生まれると母親との間で結ばれていた血管が断たれるので、時間がたつほどに空腹になるので泣いて母乳を求めます。そこで母親は自分の乳首を我が子の口にあてると、乳児は乳首を吸って飲みます。まずは乳首をよく拭いて十分に飲ませましょう。

このとき母親が心配するのは、よく飲んでくれるだろうかということです。これに対して乳児は準備ができています。「自分の口唇に触れたものは捉えて吸う」という、生まれつきの「原始反射」運動があるからです。ふれているといくらでも吸って飲むので、ときには出過ぎたとき、飲みすぎて吐いてしまうことがあります。飲み過ぎるくらいになったら、飲ませるのを止めて、乳首を被っておきます。

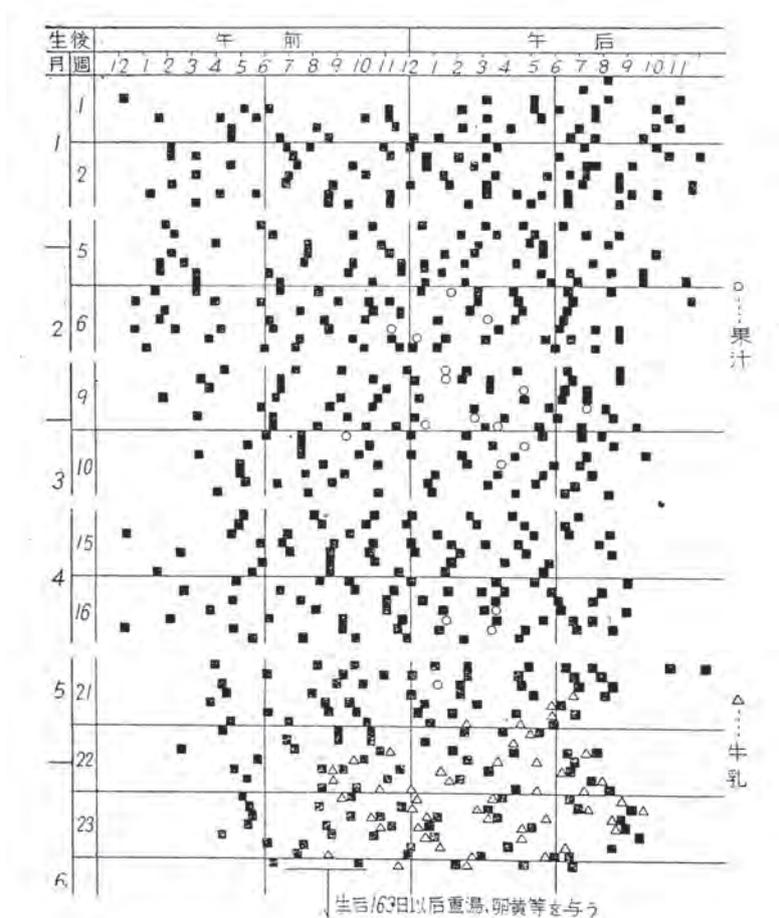
このような要領で、泣いて空腹を訴えるようなときは、昼でも夜でも時間を決めないで、1日何回でも飲ませます。

但し泣いたときは、他の原因のこともあるので、飲みたくて泣いたのかどうか、区別しましょう。始め何回かやっているうちに、見分けられるようになっていくものです。

これが「自律授乳」或いは「自己調節栄養法」(図)ともいって、乳児にとっては最も満足

した飲み方です。始めは大変ですが、泣き方で判断して飲ませているうちに、空腹のためかどうか分かるようになります。そしやがては欲しがるのが昼間に集中して、夜の飲み方が少なくなるから、お母さんは助かります。

図 自己調節栄養法による授乳時刻の分布育（乳開始まで）



母乳栄養はお母さんの乳首を吸って飲むので、乳の出具合によっては、力を入れなければならないことがあるけれど、簡単にミルクにかえないで、できるだけ母乳を続ける努力をしましょう。この力を入れて飲むことが、生まれて始めたばかりの自分の呼吸力を強くすることにもなっていくからです。

集団保育の場合は、この自律授乳の難しいことがあります。人工栄養を含めて赤ちゃんの要求に応じた自律授乳をできるだけすすめるようにしましょう。

母乳にしてもミルクにしても、これは哺乳動物として、初期に必要な液体栄養ですが、からだが大きくなるにつれて、液体栄養だけでは限界があります。そこでやがて生後半年頃になると、おとなの食に向かっての「離乳食」を始めて乳を減量していきます。

## 離乳食

生まれたばかりの新生児は、母乳又はミルクという液体栄養ですが、これだけで生後3カ月頃の体重は生まれたときの倍の6kgで、お腹の中で育っていたときの延長のようです。この頃から体重の増加は幾分少なくなり、5～6カ月頃になると、おとなの食事に向かったの離乳食を始めます。それと同時に水分の多い乳の量は少なくなります。

離乳食は段階をへてすすめていきます。5～6カ月（初期）・7～8カ月（中期）・9～11カ月（後期）で、12～18カ月頃で離乳食は完了して幼児食です。

この離乳食・離乳期という言葉は、外国にはありません。その理由として日本人は諸外国に比べて、おとなの食範囲が広くて、何でも食べる国民だからです。周囲は海に囲まれて南北と長いから、日常食品は山のものから海のもの対象が広く、しかも熱を通さない生のものまで多種多様です。おとなだけでみても、人によっても随分と好物に差があります。隣国の中国人は何でも食べるけれど、大抵は火を通してあります。

日本人は生の魚までですから、乳に始まる乳児がその後1～2年で、成人の食へ移るための離乳食には、昔からかなりの順序がありました。それには昔の人は随分苦勞があったようで、食べ物によっては、各地での試行錯誤が続いたものがあったようです。

ことに魚の生ものについては、海岸地方と内陸とでは地方差があり、今でも何歳何カ月の差のあるものもあります。

離乳食が地方で特徴のあることは当然ですが、近年はこれが食アレルギーに連動することがあるので、注意しなければならない時代です。

日本食が世界の中で注目されるとき、離乳食を基本として幼児食へと食を進める段階で、子ども達が将来日本食へ関心を広げる保育を目指したいと思います。

また食に伴う「日本の箸」の使い方も、保育所保育の頃に成功させたいものです。しかし箸の持ち方は、0歳から2歳までの運動機能の発達とは関係ありません。文化の問題です。3歳を過ぎて話しが分かるようになってから、正しい持ち方を教えましょう。

## 仰向け寝

自然界の哺乳動物が眠るときは、大部分が横向きかうつぶせ寝です。その姿勢のほうが呼吸は楽ですし、いざというとき飛び起きることができます。人の場合は様々ですが、大きくは二つに分けられます。うつぶせ寝か仰向け寝です。それはたぶんその国の住環境が関係しているようで、わが国は昔から仰向け寝が多い傾向でした。

日本は周囲が海で囲まれた南北に長い島国で、森林の占める率が世界第二位と言われていいます。水と森林とで湿度が高いところなので、住居は木造が一般的でした。間仕切りは障子やふすまで、冷暖房もなかったから、眠るときは軟らかい布団にくるまるのが普通で、仰向け寝が

一般的だったと考えられます。江戸時代の絵図では、殆んど仰向け寝です。このような状況では、ことに小さな子どもはうつぶせ寝は危険なので、生まれたときから「仰向け寝」が普通だったのでしょう。

その結果、日本の子どもは後頭部のいびつが知られていました。上を向いて寝ると後頭部は扁平。左右どちらか向かせていると、向いた方の後頭部が扁平なので、「いびつ頭」です。それでもこのような形は始めだけで、睡眠時間が短くなるほどに2～3歳頃になると、それほど目立たなくなるのが普通でした。

その後昭和50年頃から、日本の住宅事情も変わり、生活が欧米化してきたので子育ての考え方も変わってきました。そして今から20年前頃から外国のうつぶせ寝が紹介されてきたのでした。それは日本では仰向け寝によって生じる乳児の後頭部の扁平のことがあったからでした。更にうつぶせ寝の方が自然の姿勢で、眠りも安心、しかも後頭部の扁平も予防できるということが育児雑誌などで随分と、宣伝されるようになったからでした。実際に保健所で3カ月健診の折に観察すると、始めからのうつぶせ寝の場合は、後頭部の形は左右対称でした。

ところがその後平成6年（1994年）にアメリカの小児科学会において、「乳幼児突然死症候群」は仰向け寝よりうつぶせ寝に多いということが報告され、「乳児は仰向けに寝かせよう」と勧告が出されたので、近年はわが国でも仰向け寝がすすめられるようになって、今日に至っています。

## 衣服

人の体温は周囲の温度に関係なくほぼ一定です。脇の下で測るとおよそ36度～37度で恒温動物とも言われています。そこでからだはそのときの環境温度に合わせて、からだの表面を走っている血管を拡張させたり、収縮させたりして、熱の放散を調節しています。それで間に合わなければ、汗をかいて熱を放散させたり、鳥肌がたつて守ったりします。普段はそこまでなくても衣服を調節していることは、誰でも経験していることです。

しかし子育ては自分のからだでないし、本人が言葉で訴えることもできないので、親はそのときの気温や湿度、子どもの様子によって衣服を調節してあげなければなりません。

それは子どもが生まれたときからなので、子育ては先ずからだを被う衣服の調節から始まると言えるでしょう。そしてその結果はややもすると子どもを守るということで、「着せすぎ」の傾向が多いようです。

生まれてしばらくは体温を調節する自律神経の働きは不十分なので、生後2～3カ月頃まではそのときおとなが着ている程度より、1枚くらい余分に着せて、体温の発散から守るのが普通です。この頃の乳児の飲む乳量は体重の割には生涯で最も多量で、体重増加も大きいから守りの時とも言ってもよいでしょう。

3カ月を過ぎる頃になると、くびもしっかりしからだの動きも多くなるので、着せ方はおとなが自分で感じる程度と同じ枚数と考えてよいでしょう。そして生後半年頃になると、全身の動きも活発になり、その動きが新しい次の段階の運動発達へと進むので、おとなの着衣より1枚少な目がすすめられます。この頃から子どもは薄着という習慣をつけたいものです。子どもの集まりを見ていると、よく動き廻っている子どもは薄着の傾向です。やがて二足歩行という乳児から子どもへというときで、全身の運動機能が完成するときです。全身運動のためにもこの頃からの着せ方は厚着に注意です。

## 子育ての背景にあるもの

自然界の動物は、自分達が生きたり子どもを産んだり育てたりするためには、その条件にあった季節・場所などを選んでるので、長い歴史の中で、それぞれの動物が生存する場所は決まっています。北極熊は北極の地ですし、キリンやライオンなどはアフリカです。生まれた子は親に育てられるというより、かなり早い時期から自立してしまいます。

人は地球上のどこでも子を産み育てることができます。人の子どもは、生まれた段階ですべてが無力で自分で乳を求めることさえできないけれど、親はその土地で我が子を育て成人させています。それには衣食住のすべてが親にかかわることなので、出産・育児にはその土地の条件があるだけでなく、子どもの育ちにも影響が及びます。その結果が各国の「子育て」ということになります。本書であげた「仰向け寝」も「離乳食」も、日本ではそのような背景があったからです。そこでここでは日本の子育ての背景にある「気候風土」をまとめておきます。

## 日本の気候風土

日本は南北に細長く、北海道から沖縄まで約3,000kmの島国で、大きな太平洋と日本海で囲まれています。しかも全体が細長いので、陸面積の割に海岸線が長いから漁業に有利です。地球上の位置は北緯45度から沖縄の北緯25度までの南の国です（東京は北緯35度）。

この日本の位置は、欧米の先進国に比して南方で、例えば東京はアフリカのモロッコ、アルジェリアです。最北端の稚内は南フランスのニースです。

全体に日本は南方なので、太陽光線が強く、ことに紫外線の量が多いことは、子どもの健康や外での遊びにも関係することです。また島国なので湿度が高いから、マレーシアの「雨季」に似た「梅雨」（つゆ）があります。

冬にはシベリアからの冷たい風が日本海側に大雪を降らせ、太平洋側は乾燥です。

このような島国の日本には山が多く、森林・畑・川・野原、そして長い海岸線です。近くの海では暖流と寒流の交差だから、農産物、海産物が豊富です。しかも諸外国から離れているので、日本特有の食物、料理法を生み出しているから、近年の日本食は世界の関心事で、子ども

の食にまで及んでいます。

身近な離乳食そのものは、日本の食の特徴でもあります。

更に日本だけを見ても、地域単位での食の特徴があります。子どもの育ちに関する地域的な食の問題も普段気付かれることでしょう。日本という国の自然は子育てに大きくかかわっていて、ときに子育ての知恵を引き出してくれていることがあります。

## おわりに

「子育て」は人達の長い歴史のなかで行われていると同時に、それぞれの国の生活環境に負うところがあります。そしてそれらは日常のごく普通の生活習慣として、親から子へと引き継がれてきています。そこで本展望では子育てのなかでも避けることのできない基本的な「栄養」「睡眠」「衣服」の三項目を取り上げました。なお日本的な子育てのなかには、生後間もない頃の「乳幼児突然死症候群」を予防する方向での子育て（仰向け寝・うす着・母乳栄養など）が、伝承されてきていたことは幸いです。

## 2 展望(2) 子育て相談をするには

大方美香

### 1. 子育て相談をする人はどのような悩みに直面しているのでしょうか

子育て相談は、相談者と保護者の両者が子どもを中心において、対等に手をつなぐ関係であることが大切です。相談者が保護者に行うのは「指導」ではなく、「援助」または「支援」であることを忘れないようにしましょう（113ページ図Aタイプ～Cタイプ参照）。

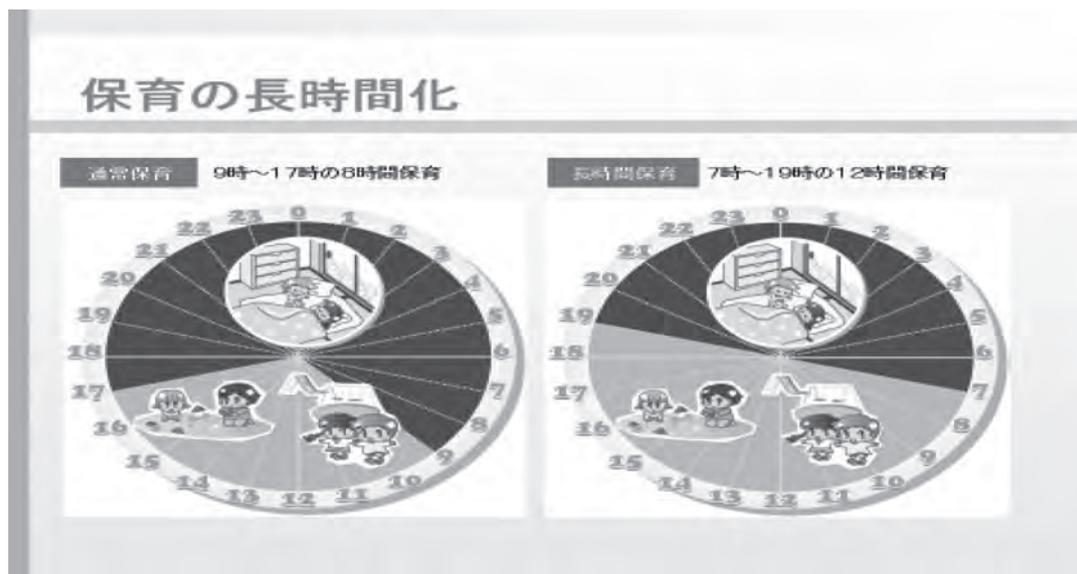
#### (1) 家庭養育の主体は保護者であることを理解する



上の図を見てください。今日の前にいる人は大人としての保護者や親であるかもしれませんが、いろいろな立場を背負った一人の生活者です。その人自身の人生を認めた上で、相談・援助を行うことが大切です。また、一人一人の人生が異なるように、子育て観も今までの生活、子ども時代の経験や体験を通して培われていくため、様々です。当然、子育ての相談内容や相手が求めていることも異なってきます。そのことに視点を置きながら相談内容を傾聴してください。何を相談したいのかが見えてくるかもしれません。

#### (2) 生活者としての保護者であることを理解する

保護者もまた一人の生活者であり、働く人です。保護者は親であっても保育の専門家ではありません。長時間・長期間保育の時代では、家は子どもにとって「寝るだけ」の場所となっているようです。保護者にとっては、子育てと同時に家事労働や自分の仕事があります。



保育の長時間化は、保護者と子どもの共有時間が激減していることを表しています。そして、保護者は子育て時間の他に、家事労働や他の家族との関係、仕事との関係など様々な役割を担っていることを忘れないで下さい。長時間保育の場合には、家では親子ともに疲れた時間であること、いい状態で対面していない時間であること、保育時間は昼間であり活動中の時間であることなどを考えた上で子育て相談を受けてください。保育中のイメージだけで子育て相談の内容を考えないようにすることが大切です。

### (3) 保育実践で保護者の信頼を得る

保育実践での信頼は、保育者の専門性を認めてもらったことにつながります。「家でこんなことをするといいですよ」と助言をしても、保護者は保育への信頼がなければ受け入れません。信頼を得るためには、「〇〇をした」ということではなく、その活動や遊びが子どもの育ちにとってどのような意味（ねらい）をもっているのかという説明が必要です。

### (4) 保護者を信頼する

保護者を信頼することは、お互いの思いが一致することです。お互いの言葉が同じイメージで伝わっているのかをいつも振り返り確認することが大切です。善意で伝えたつもりがイメージを共有出来ずに誤解され、気まずい関係になることもあります。

## 保護者はどんな悩みに直面しているの？

1. 保護者自身の子どもとの接触・人とのふれあい体験が少ない
2. 保護者自身の子ども時代の子育て体験と比較してしまう
3. 保護者自身の自己解決力・自己コントロール力が低い
4. 保護者自身の遊び体験が少ない
5. 保護者自身の家事力が少ない

### (5) 保護者と保育者は同じではないことを理解しましょう。

「保護者なのに」や「愛情不足」というような、抽象的でしかも否定的な言葉は、保護者を傷つけることがあります。保育の専門家ではない保護者に言ってはいけない言葉です。保護者と保育者は同じではありません。子育ては皆初めての経験であり、とまどいや不安はあたりまえです。保育者が客観的に見て、愛情のかけ方が少ないとか、愛情が不足していると感じても、保護者として愛情を込めて育てている場合も多く見受けられます。

## 保護者はどんな悩みに直面しているの？

1. 身近に相談する人がいない(家族・友人・地域・親戚・等)
2. 家族の子育て参加、協力が得られにくい(祖父母・夫・等)
3. 経済的な悩みを抱えている (本人・家族)
4. 精神的な悩みを抱えている (本人・家族)
5. 身体的な悩みを抱えている (本人・家族)

子育て相談を受ける上で忘れてはならないことは、保護者自身の環境にも視点を持つことです。上の表のようなことに思いを持ってほしいと思います。対話する相手が誰か一人でもいれば、解決できることがたくさんあります。一人で抱え込まなければならない苦しみやつらさを

感じて子育て相談にのってほしいと思います。家族がいても、実家があっても対話できない関係が現在の人との関係性です。人との関係性は、パソコンやインターネット、ラインなどの情報では得られず、対話する関係性が人には必要です。

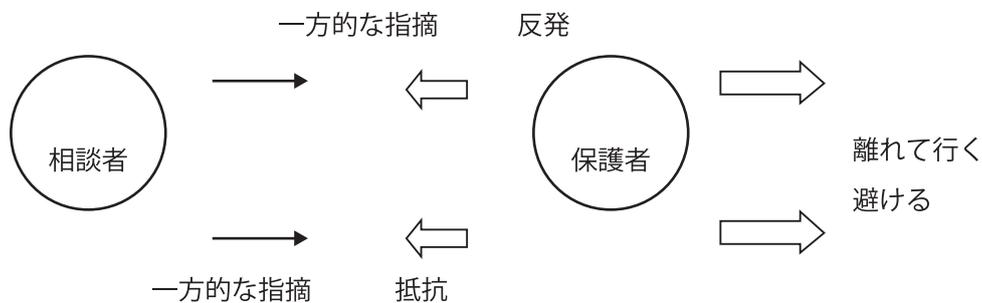
### 保護者はどんな悩みに直面しているの？

1. 子どもの欲求・サインがわからない(泣く・求める・行動)
2. 子どもの発達がわからない
3. 子どもの関わり方・言葉のかけ方がわからない
4. 子どものしつけがわからない
5. 子どもの遊びがわからない
6. なぜ他の子と同じように出来ないのかがわからない

子育ては、一人一人事情が異なります。上の表は、保護者が子ども自身のことが分からなくて困っている内容です。ここに書いているように、親だけれども、自分の子どもだけれども「わからなくて」困っています。子どものどこが分からないのか、何が分からないのかをワークシートなどをつかって整理しながら子育て相談を受けてください。このような方法で相談者の悩みを明らかにし、解決していくことも大切な視点です。

## 1. Aタイプ

相談者と保護者との心の交流がない状態での相談者の一方的な働きかけは、保護者との関係性を損ねる。

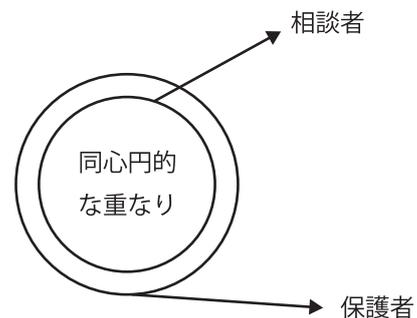


- ・相談者と保護者はお互いに距離があり親しみや交流がうまくない。

- ・相談者の一方的な指摘に、保護者は相談者に反発したり抵抗したりする。時には避けたり距離ができたりする。

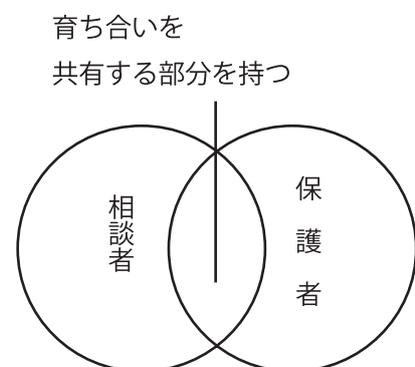
## 2. Bタイプ

- ・相談者と保護者がまるごとべったりと結びついて共生的感情をもつ。
- ・感情的な一体感を持つが、理性的、対話的な育ち合いは見られない。



## 3. Cタイプ

- ・それぞれの主体性や育児感を尊重しながら、子どもの育ちや発達については共通理解をもち、同じ方向をめざしてパートナーシップができる。
- ・保護者の支援内容によって、重なり合う部分を多くし、援助する。信頼関係ができると、重なり合いの部分は少なくなり、手を取りあって同じ方向にむけて育ち合っていく。



## 幼児にとって「自然」とは何か

生後3ヶ月の子どもでも抱いて外に連れ出すと、あたりを眺め樹木の緑や花に目をやり、風のそよぎや日光を浴びて、気持ち良さそうです。もう少し大きくなると、機嫌が悪く愚図っていても、乳母車に乗せて外に連れていくと、途端に機嫌を直し次々と興味をひかれた物に目をやり、声をたてたり手をバタバタさせて喜んだりします。乳幼児たちの姿を見て、これだけ興味をもたせ、飽きずに、刺激を与える環境、すなわち、自然の環境の持つ意味は実に大きいと思います。

時間に追われている私たち大人は、多くのことを当然の事のように受け止めてはいないでしょうか。太陽は毎日決まって昇ったり沈んだりするものと思っただけではないでしょうか。朝日や夕日に感動することもなくなってきたのではないでしょうか。周りの風景が色々に変化していくのに、見たり、聴いたり、感じたり、においをかいだり、味わったりする余裕を私たちはなくしているように思うのです。

しかし、幼児は本来そうではありません。幼児は立ち止まって、鳥の小さな羽根を拾ったり、チョウチョが花の周りを飛び回っているのを見たり、暖かい陽光の下で猫の親子が戯れあっているのを見て笑ったりします。ポトポト落ちる雫の音でさえ、耳を傾け興味を示します。

このように、散歩に出かけた幼児は自分の五感を使って、美しい自然を見、咲き誇る花の香をかぐのです。幼児にとっては直接に経験することが大切であり、試してみて初めて認識するのです。そして、そういう態度こそが最も良い学習へつながると考えます。

「自然」は、ある意味で子どもの周りのいたるところにあります。子どもは「自然」に取り囲まれて生活していると言えるでしょう。ここでは、幼児にとっての「自然」を、幼児期における自然との具体的な触れ合いをとおしての教育と考えます。それは、単に自然の科学的概念、法則を記憶させ理解させるというではありません。自然の概念、法則の認識を通しての自然と人間との関わり方の認識や、自然との触れ合いを通しての人間形成を目的とします。

自然との経験は、幼児にとってどんな意味があるのでしょうか。自然現象は、身近な日常生活とは切り離せないものであり、自然と人間との関わりは、切っても切れないものです。すなわち、幼児は自然をとおしての豊かな経験によって、正しい認識を得ることができます。人間が自然の中で生まれ、自然のなかで生きていくものである以上、当然でしょう。

では、現代の子どもの生活と自然との関わりはどうかになっているのでしょうか。

## 現代の子どもの生活と自然

今日の子どもは、21世紀の市民です。どんな事が彼らを待ち受けているのでしょうか。子どもたちに、何がやってくるのでしょうか。また、子どもたちにどんなことが要求されるのでし

ようか。考えずにはいられない社会状況です。

近年、子育て支援は花盛りです。何かというと「子どもの幸せ」ばかりを唱えているかのようです。やはり言葉に流されるのは、日本文化の一面を表しており、致しかたないとしても、世の親や、まして幼児教育に携わる者までが踊らされているかのようです。

デマに近い過剰な情報に踊らされ隣の子どもに遅れを取るまいと、早期教育に躍起になってしまっていることがあります。反面、登校拒否、自殺、いじめ、非行といった事が紙面を賑わす毎日でもあります。

現代科学の進歩には、確かに目を見張るものがあります。人間が月に行くことも、もはや夢ではなくなり、日一日と新しい科学技術が登場してきます。日常生活を思い起こすだけでも、生活は、豊かに便利になりました。そして、近年のコンピューターの発達は、人間の頭と手の働きを大きく助け、より豊かな人間文化を創り出そうとしているかのように見えます。

しかし、どうでしょうか。文明の進歩とともに、私たちの生活環境は人工的なもので溢れ、人工的な取り扱い方が当然だとされるようになったのではないのでしょうか。

今日の子どもが、この科学技術の進んだ世界で活動的な人間として、将来の日本人が世界に対して自信をもち付き合いのできる、つまり、幸せであるためには、一体何をどうすればよいのでしょうか。何を教育すればよいのでしょうか。善良さ、純粋な人間的資質が、彼らに必要なのではないのでしょうか。そんなものは必要ない、善良さは生きる妨げになるという声も聞こえます。果たして、それでよいのでしょうか。

幼児教育の立場に立って考える時、幼児期とは、「自分とは、どんな人間なのかという意識を作り上げていく時期」ではないかと考えます。

幼児は最初に自分自身を認識します。空腹の時、着替えが必要な時、怪我をした時、愛撫されている時を知っています。つまり、毎日自分の身体や能力を使って環境に働きかけながら、認識を育てているのです。ここで大切なのは良いセルフイメージ（自己概念）を持つことです。自分自身を肯定的に認識する事は、環境を認識する事に通じます。散歩に出かけた幼児は、自分の五感を使って、美しい自然を見、咲き誇る花の香をかぎます。保育者や周囲の大人は、幼児と共に時間をかけて周囲を探索し、幼児の興味に注意をして、環境を認識するのを助けなければなりません。しかし、草の上の小さな虫たち、また雨上がりの虫の様子など、幼児が最も強く心をとられる事に目が向けられていないのではないのでしょうか。テレビに釘付けになっている子どもには生の体験がなく、感動がないように思います。驚きと喜びを経験する事が、あまりにも乏しい現状といえるでしょう。

人間は、昔から自然と共存することにより生活を営んできました。人間もまた自然の構成員の一つであり、自然を離れては人間の存在はありえないと考えます。特に、幼児期は自然そのものと人間が関わる第一歩であり、自然の中で遊んだり、自然に関わる活動を通じて自然に親

しみ、自然と調和することのできる心情や態度の芽生えを培う大切な時期です。

ところが、最近の子どもたちを見ていると、自然の大切さを知らずに育っているものが多いのです。今の子どもは、小さい時から人為的な玩具、模擬自然に慣れ、人口栽培された花や果物はもはや自然ではなく、お金を出して買うものという認識を育て、昆虫さえもデパートや夜店で買うものとして受け止められています。たとえ野菜は土から取れるということを知っていても、自分たちの体験に結びつかない知識でしかありません。文明の進歩による人間の豊かさ、便利さとは裏腹に、人工的なものを「あたりまえ」として受け止めているのです。そして、その「あたりまえ」が何よりも恐ろしいのです。この不足を補うために絵本の読み聞かせは有効といえます。

子どもの心は本来、自然に対して素直に反応するものです。子どもの目の高さ、子どもたちの物を見る位置は、大人とは異なります。大人よりずっと近くに地面や虫を見ます。草花を見ます。それだけ身近であるともいえます。このことは、決して大人の感覚を子どもたちに押し付けるのではなく、子どもは、自分たちの感覚を通して、子どもなりに実物を具体的にとらえてこそ認識できるということを示しています。

それでは次に、幼児の発達とは何かを踏まえ、子どもの活動意欲という事に主眼をおいて、保育と自然との関わりを考えてみましょう。

## 保育と自然との関わり

母胎を離れた赤ちゃんは、人間の子とはいえ、脳の発達が未熟なままで生まれてきます。そのヒトが、無限ともいえる可塑性を持って生まれてくるのです。ヒトの変わりゆく力の偉大さを知ることができるでしょう。

しかし、その変わりゆくべき方向を、人間の子、ヒト、赤ちゃんは知り得ていません。人間の社会に生み落とされたヒトは、人間、先人の導きによって「人になる、人間になる」のです。

子どもが生まれてしばらくの間は、眠るか乳を飲むか抱かれて過ごします。スキンシップの重要性はもちろんのこと、何も反応もないころに天井からメリーゴーランドを吊るし、ガラガラを振り、言葉をかけ、子守唄を歌って寝かせます。ごくありふれた仕種の中に、長い経験が生みだした子育て理論が含まれているのです。一見、無駄な働きかけのように見えますが、これらの刺激を与えられてこそ人間らしく育つのです。

「狼に育てられた子」「アヴェロン野生児」のように、人間の刺激が与えられない時は、人間の形をしていても人間の子どもとして育ちません。

このことは、一歳前後の直立の姿勢で歩行を開始する事実においても言えるでしょう。我々新人—ホモサピエンス—としてのヒトは、進化の過程で直立歩行をわがものにしえた段階であると言われていますが、その直立の姿勢で歩行が可能になることすら、人間の導き（教育）を

必要としているのです。単に放置されていて、あるいは他の動物に育てられていては、人間の歩行はあり得ません。つまり、認識機能を持ち合わせた器官（いわゆる大脳に象徴される）を持っていることです。そして、ルソーの見解を借りるならば、「内なる自然」である器官の内部的発展をうながしやすい時期に、その機能を引き出すこと、また、引き出しえた能力を日常生活の中で使用し続けることが必要です。すなわち、ヒトは可塑性を持った物質体として生を受けるが、人間の育ちゆく姿は、単に生物学上での成長（生理的変化）、成熟（生理的変化の水準）にとどまるのではなく、能力を獲得しつつ大きくなることを意味しています。人間が直立の姿勢で歩き始めるという当たり前のことが、人間として生きていく上での大事なスタートです。ここに、教育の必要性、また、環境の持つ意味が明らかにされるでしょう。

エンゲルスは、「猿が人間になるについての労働の役割」の中で、次のように述べています。

「数十万年前に、地質学者が第三紀と呼んでいる地質時代一中略一、特別高度に進化した類人猿の一種が住んでいた。ダーウィンが我々のために、我々のこの先祖についておおよそのところを記述してくれている。彼らは全身毛で覆われ、髭を生やし、尖った耳を持ち、樹上に群棲していた。

おそらく初めは、木に登る際に手と足と違った仕事を割り当てる彼らの生活の仕方に影響されたのであろうか。これらの猿は、平地を歩くのに手の助けを借りる習慣をなくし始め、次第に直立して歩く習わしを身につけ始めた。これをもって、猿から人間に移行するための決定的な一歩が踏み出されたのである。」

無限の可能性を秘め、しかも可塑性に富んだヒトは、教育の力によって、人間的諸能力を自己のものとしします。では、豊かな教育さえしていればよいのでしょうか。どんなに豊かな教育であっても、その教育が、子どもを生き生きと動かす（活動する）ことがなければ、可能性を引き出すことはできません。つまり、活動のないところに発達はないのです。じっとしていても、能力を引き出すことはできないのです。自ら身体を使い、興味、関心→探究→発見という、幼児が素朴な形で、精一杯楽しむ営みの中でこそ引き出されるのです。しかも、子どもは、子どもの中で・集団の中でこそ発達します。生き生きと動きまわる子どもたちの中でこそ、活動の源泉である活動の意欲（内発的動機付け）が、子どもたちの中に芽生えるのです。

それでは、どのようにして活動意欲が、子どもたちの中に生まれ、強化させるのでしょうか。

発達を促すためには、発達に応じ、発達に必要な活動を、子ども集団の中で教育的に与えられることが求められます。それゆえ、発達の条件は生活条件を含む教育的環境と人間（子ども）集団であると言えます。そして、これらのヒト、子ども、人間の活動を促す力、エネルギーこそが、自然との関係において互いに始動すると考えます。

一般に、事物がそれ自身単独で動き出すことはありません。事物は、その事物と関係する外界との力関係で、働く方向、内容が決定されるといえるでしょう。個々の事物は、他の事物、

外界とどのような関係にあるのでしょうか。

このような事実は、ヒト・子ども・人間の場合にあっても指摘できると考えます。つまり、他の事物、外界（ヒトにあつてはいわゆる事物と人間）との関係で生まれる始動エネルギーを、子どもにとって有効ならしめるためには彼らに準備する外界、その子どもへの外界からの作用が問題となります。その外界は、いずれの場合も子どもの活動を促す外界でなければならないのです。したがって、活動的意欲とは、子ども自身の内に自然発生的に生まれるのではなく、子どもと関係する事物・人（外界）との関係において生まれるのです。

このように考えると、豊かな発達をもたらすためには、幼児における保育の在り方が問われてきます。どのような活動が、より可能性を導くのでしょうか。「○○ちゃん、△△をきなさい」という言葉かけが、大人の期待する活動を始動させうるにたる関係なのでしょうか。決してそんなことはありません。さらに、「今の子どもは意欲がない、遊ぼうとしない。」という観察は、意欲を発生させうる関係作りを無視したものであり、問題の解決を放置する危険を伴います。

今の子どもたちは、現象的には、かつての子どもと比べて大きく変わってきています。こうした社会状況を考えた時、これを昔のような生活に戻せと言っても、それは不可能なことも多いでしょう。そこで、今の時代の保育を考えるにあたっては何も懐古趣味にひたる必要はなく、変化していく時代の要請に対処して、これからの時代に必要な保育を考えることが大切であるという見方があります。例えば幼児期からどんどん機械に慣れさせる、テレビや視聴覚教材を活用する、文字や数などに関する保育内容を重視する…などがそれです。かつてのように豊かな自然は取り戻せないとしても、動物や植物を大切に思う心を育てるような環境や、その中で触れ合いが、どうしても必要です。図鑑やテレビなどから仕入れた知識だけでは、動植物を我々と同じように命を持った存在と考え、心と心を通いあわせることのできるような力は身につけていかないと考えます。自然をとおしての「感性」「感じる心」を培うことこそが今の保育に最も必要なのではないのでしょうか。